
【キセキ = シリーズ】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【キセキシリーズ】

【Nコード】

N 6 1 3 2 Z

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

『不治の病』を患った吸血鬼の少年は、世界列車に乗って余命の旅に出ることにした。その足取りに捨てきれない迷いを滲ませながら。

『科学の街』直属の特殊部隊所属の少年は、日常的に対バンライブを行っていた。可も不可もない日々の安定を、少しも疑わないまま。『神秘の体』を有する殺し屋の少年は、息苦しい世界で死に場所を求めていた。まるで、これまで何度もそれを試してきたかのように。『殺しの罪』を背負った囚人の少年は、地図には載らない監獄の島

で生涯を収めようと決めていた。とある少女から現実逃避するためだけに。

それぞれの日常は境界の合図もなく壊れ始め、終焉の物語、その渦中へと吸い込まれて行く。

そして……

この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

???
(前書き)

この物語はモダンチック異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

???

あなたが軌跡を望むなら

歌はいつでも赤く集束して紡がれる

だって 私もソレを陰から望んでいたから

あなたが奇跡を祈るなら

唄はどこでも黒い理由で塗り潰される

だって 私もソレを裏から祈っていたから

あなたが輝石を願うなら

詩は誰からでも白き群像で惑わされる

だって 私もソレを闇から願っていたから

そして ここは に至る物語

されど ご覧の通り 始まりではなく

だからと言って 終わりでもない

ただ ただ 過去と未来に直結した現在

なにしろ むしろ

真相を知るのは やっぱり

私と だけなのだろうから

1 『赤い糸』の先に一筋の希望を願って

とくん、と。

左手の小指に微かな鼓動を感じた。

見ると、そこに燐光のように淡くて儚い輝きを放つ『赤い糸』がある。

幻覚にも似たその現象を目にし、少女は一瞬だけ呼吸を忘れるくらいに驚いた。

瞳を閉じて深呼吸。

瞼の裏に映る不完全な暗闇に身をゆだねると、胸が異常に高鳴っていることに気がついた。

高揚しているのか緊張しているのか、感情の置き場所さえ把握していないのに、自然と握る両手に力が入る。

その手のひらは妙に汗ばんでいた。

再び目を開けるのには、多少の時間が必要だった。

それは何も育まれていないがらんだ心の心より、まばらな勇気を一ヶ所に掻き集めるための時間だ。

瞼の奥に視認する広大な闇の中、星屑のように散らばる光を手当たり次第手元に寄せる。

そんなイメージで集まった灯は、少女の小さな両手に収まるくらいちつぽけなものだった。

それでも、彼女が自身の背を後押しするのに、十分な光量が宿っている。

願わくは、今の『赤い糸』が幻想ではありませんように。懇願にも等しい想いを抱いて、少女は瞳をそっと開く。

あった。

左手の小指。

その第一関節に一巻きだけ結びついた『赤い糸』。

それは生まれたばかりの赤ん坊みたいに、たどたどしい脈動を打ちながら少女の指先より虚空に浮遊し、どこかへと流れている。

糸が出現する条件や理屈は分らない。

だが、これまで不吉を象徴とする『黒い糸』ならば、度々発見していた。

覚えている限りでは一六回ほどだ。

その糸がどの方向に繋がっているのかを、『彼ら』に案内するのが彼女の役割だった。

もつとも、せっかく見えた『黒い糸』は、『彼ら』に教えると決まって数時間後に消失してしまう。

だから、『黒い糸』の意味を深く考えたことはない。

また考えてはいけない気がした。

しかし今回、唐突に現れたのは『赤い糸』。

そんな福音の象徴を目で追うのは初めての経験だった。

おそらく劣悪な生活環境のせいだろう。

成分不明の黒いシミがこびりつく灰色の壁と、壊れかけの豆電球。取ってつけたような洗面所。

天井近くに設けられている、空気を循環するには心もとない小さな鉄格子。

いわゆる独房と呼ばれる場所。

湿気と閉塞感ばかりを孕むこんな粗末な空間にいれば、温色を示す『赤い糸』を拝めない理論も頷けた。

なぜなら『彼女の右眼でしか可視できないその糸』は、彼女と他者を紡ぐ運命的な数字および『血』を素材としているからだ。

そういうルールである以上、『彼ら』に独房で管理されている少女が、外の世界の誰かと繋がるきっかけなど無に等しい。

『彼ら』の目的に沿って偶発的に目撃している『黒い糸』ならまだしも、本来なら赤など有り得ないはずだった。

なのに、こういう因果かこうして奇跡は起きた。

少女の細い小指に巻きつく糸の先には、彼女と『赤で結ばれるベ

き誰か』がいるのだ。

けれども今次、少女が見取った『赤い糸』はあまりにか細くて頼りない。

横から微風が掠めただけで切れてしまいそうだ。

その上、少女が我が目を疑うように糸を視線でなぞっているうちに、純粹な赤だった色は定期的な明滅を始め、徐々に黒に歩み寄る朱へと変色しつつある。

まるで彼女を急かすみたいに。

ふいに、少女は錯覚に襲われた。

重たい石が腹部に腕を伸ばして、しがみついてきたかのような感覚。

原因はきっと彼女の思考が、大きな逡巡に行き当たったせいだろう。

この小指に絡まる『赤い糸』の先を手繰り寄せたい、という葛藤。それはある種、成長の兆しなのかもしれない。

一〇年間、『糸を感知するための道具』として多くの時間を不衛生な独房で呼吸してきた彼女は、一度だって『彼ら』に逆らった例がない。

反旗を翻すという思想そのものに至らなかったのだ。

これが異常ではなく普通。

常識的な、極めて一般的な生活なのだと徹底的に調教され、少女は灰色の壁の向こう側に広がる世界に、さほど興味を抱けなかったゆえに、『何か行動を起こすにあたって、迷いや戸惑いが生じることもある』といった心理を、道具として生きていた少女が知るはずもなかった。

道具は利用されて当然。

むしろ誰かに使ってもらえなければ存在意義そのものが崩壊する。だとしたら行動することに疑問なんて感じている場合ではないのだ。

そう頭では理解しているのに、少女はどうしても慣れ親しんだ行

動を実行に移せなかった。

今すぐ『彼ら』を呼んで、黒ではなく赤が見えたことを報告しなければならぬのに、あたかも前触れもなく現れた『赤い糸』が、彼女の歪んだ常識を内側から打ち砕いたかのように、できない。

そう、少女はすでに決断しかけていた。

『ここから逃げて自由を手に入れよう』という結論を。

もちろん恐い気持ちも強かった。

逃げ切れる算段だつてない。

捕まった後のことを想像すると、やはり恐ろしくて足が震えてしまふ。

ここから逃亡したりすれば厳しい罰が待っていると、『彼ら』に実体験で教え込まれたせいだ。

恐怖に対抗するために要する勇気の量は、先程用意した分の比では到底足りない。

それに、たとえこの場を奇跡的に凌いだとしても、『彼ら』は地の果てまで追いかけてくるだろう。

無機質な壁の外に寄る辺ない少女には、勝算が少なかった。

この四角い世界で大人しくしていれば自由はないが、安全はある。待遇は悪いが、生きていられる。

下手なことをしない限り、恐い目や痛い目に遭遇することもない。そんな選択の前に佇んだ少女は浅く下唇を噛み、しばし利潤とリスクを天秤にかけた。

吟味した上で、決意した。

この『赤い糸』の先にいる、名前も顔も知らない誰かに会いに行くことを。

ふと、これが自由を手に入れるための、最後のチャンスのような気がした。

直感だ。

思い過ごしかもしれない。

だったら、それはそれで構わない。

どうせ後づけのような理由なのだから。
そうして。

生まれて初めて漠然とした自由に恋焦がれた少女は立ち上がり、
施錠部分が腐りかけている独房の扉と向かい合った。

一本道だった未来を自ら切り開くために。

『赤い糸』の先に一筋の希望を願って。

2 | 何かを期待している彼女の眼差しに、けれどハイクが答える声はなかった

目の前で数え切れないほどの群衆と化した人間が、巢に向かってせつせとエサを運ぶ働きアリみたいにごった返していた。

しかし、混雑の流れに秩序はなく、複雑な放射状を描いている。縦横無尽に際限なく入り乱れる人々の動きは、途切れる気配など微塵も垣間見せてくれない。

もしも人間と羽虫くらい極端に大きさの違いのある巨人が、この混沌とした群れを雲の上から見下ろしたら、無数の昆虫が蠢いているように気持ち悪く思っただろうか。

そんな取り留めもない皮肉を、ハイク「R」セカンドは胸の中だけで述懐した。

「参ったな。人混みは苦手だ」

眉間に不快混じりのシワを寄せながら、ほとんど唇を動かさずに独り言つ。

その囁きさえ自分の耳には届かずに周囲の雑踏に埋もれるのだから、ハイクが不服に顔をしかめるのも頷けた。

真昼の『世界鉄道』駅前は不慣れな者が歩くと、ものの一秒で他人と肩がぶつかる。

それほど多種多様な国籍が、駅構内の界限には行き交っているのだ。

彼らは一様に携帯端末やら小説やら音楽プレイヤーやら何やら、自ら視覚と聴覚を遮断して前方不注意な状態で進軍しているのに、まるで第三の瞳が額に付属しているかのように人混みの濁流を巧みにすり抜けている。

その闊歩技術は慣れで培ったものなのだろうか。流れに棹さす彼らを俯瞰的に眼球で追っているだけでも、ハイクは酔ってしまいそうだった。

（どうして連中は、あんなにも上手く進めるんだろうな）

そこでハイクは切符売り場の方に非難がましい目線を移した。

そこには並ぶ気が星の彼方まで遠のく長蛇の列が展開している。

販売機は何十台も横並びに設置されているが、需要と供給のバランスがまるで一致していない。

誰一人として、しかるべき改善を施すように国に推奨しないのは、この時間帯が限定的に集中して混み合うピーク時だと理解しているからだろう。

ハイクは肩で溜息を吐き、そつと右手を握り締める。

手中に求めたのは、『世界鉄道』の中で最も値段が高い切符の感触だ。

『永久切符』。

どこで下車しても構わないという宿泊ルームつきの無期限切符である。

恐ろしく長い行列の最後尾から、心を折ることなく辛抱強く並び続けた成果。

手に入れるのに苦労した。

あの貴重な経験はできれば二度と味わいたくない。

最初くらい行き当たりばったりではなく調査するべきだったかもしれない、と猛省しても後の祭りである。

（さて、気力もチャージしたことだ。そろそろ行くか）

ハイクは切符を握ったまま前方を見据えた。

いつまでも現実逃避気味に立ち止まっているわけにいかない。

切符を購入した次には、第二の試練が待っている。

駅前のスクランブル式交差点と駅構内の境界線上に、一時的避難をしていたハイクは意を決して一歩前へと踏み出した。

たちまち携帯電話で取引先かどこかと通話中のサラリーマンと肩が接触し、外へ弾かれそうになる。

サラリーマンはハイクに一瞥もくれず、キャリアバックをごろごろと引きながら人の波を海水魚のように泳いで消えて行った。

早速、出端を挫かれた気分を味わった。

しかし、ここで膝をついたら負けだ。

ハイクは気を取り直して人々の生け垣へと潜り込む。

目的の改札がどこにあるはずなのだが、渦の中心では東西南北さえ怪しかった。

さながら樹海の奥地にでもさ迷い込んだ心境である。

コンパスの代用として駅員に訊ねようにも、目にするのは忙しげに擦れ違う人々の頭ばかりで、もはやどこにいるのか見当もつかない。

となれば頼みの綱は案内の矢印だ。

ハイクは人と人の脇を縫うように、『世界鉄道・東大陸南行き』のプラットホームを示す矢印をひたすら追いかけた。

濁流を構築する人の密集度は奥に進むに伴って、いつそう濃厚になっっていく。

全神経を鋭敏に働かせ、ゆっくりとではあるが着実に前進する。

急がば回れ、だ。

やがて拙くはあるが、前後左右の不規則な流れでも前進する要領を得てきた。

スタートラインから目的の改札まで、ようやく半分近く進んだところである程度のコツを掴み、ハイクの心にも余裕が生じる。

そんなおり、化粧室のマークが目に残った。

集中力を限界まで引き上げていたハイクはこれ幸いに、一休みという名目で男子トイレに立ち寄った。

中には誰もいなかった。

外ではあれだけの人間が溢れているのに、青いタイル張りの空間だけが時流に乗り遅れたかのように乖離していて、奇妙な感覚に陥る。

（まあ、そういうものなんだろう）

諸事情によって少しばかり『一般常識』に疎いハイクは勝手にそう納得してから、洗面所の鏡に顔を向けた。

そこでやや疲弊した様相の自分と目が合う。

くせつぽいが、清潔を保つように整えた黒髪。

くつきりとした二重瞼。

漆黒の眼球。

色は白くても健康さを伴う肌。

年齢は一七だが、顔立ちはそれより若干大人びている。

中肉中背がまとう衣服はとても身軽だ。

赤と黒の細かいボーダーラインが入った半端袖のTシャツの上に、ダークブルーのフードつきパーカー。

下はグレーのサルエルパンツとショートブーツ。

装飾品は素朴さが意外とお洒落な風味を醸し出している腕時計のみ。

これから『世界鉄道』に乗って目的のない、さすらいの旅に出るといふのに手荷物のバッグ一つ持っていない。

旅行に必要な日用品くらいなら『列車内の設備』で購入できるとは言っても、ここまで手ぶらな乗客も珍しいだろう。

ハイクがこれから乗車する予定の『世界鉄道』という路線は、基本的に庶民が乗れるような交通機関ではなかった。

政府のお偉いさんや世界的な著名人しか乗車できないとか、そういう地位の格差を内包する嫌な話ではない。

もっと単純に金銭的な面で一般人が手を伸ばしにくいのだ。

その代わり、切符を購入できるだけの金さえあれば誰でも乗れる。

この惑星の六割を占める海域を分かť、東大陸と西大陸。

そんな空と海と陸の領域を持つ世界を、国境に関係なくレールで繋いでいるのが『世界鉄道』だ。

街から街、国内から国内単位の移動ではなく、国内から国外への有意義な移動を旨とする旅客のための列車。

ただし歴史はまだ浅い。

現時点では東大陸にしか路線も展開されておらず、西大陸とは結びついていない。

しかし、噂によれば海の上を線路が走る科学技術も、すぐそこま
で完成しているらしい。

いずれ『世界鉄道』が世界を結ぶのも時間の問題なのかもしれな
い。

ハイクが与り知らない大人の事情が解決されれば、の話だが。
ハイクは鏡の中の自身から視線を逸らし、腕時計を確認する。
乗車予定の列車が出発するまで、しばしの猶予がある。

昼時ということもあって空腹は感じていた。

情報によれば列車内には、有名なシェフが運営する高級レストラ
ンも多く導入されているようで、味も一流なのだそうだ。

上級なご馳走にありつくには、まず改札である。

目下の懸案は命の次くらいに大切な手元の切符を失くさないよう、
そこへ辿り着くこと。

あの荒波のような人の流れに戻るのはいささか憂鬱だったが、そ
の後に待つ世界の想像が眼前に立ち塞がるデメリットさえ中和して
くれる。

（踏ん張り時だな。ここさえ乗り越えれば天国が待っている）

天国が、待っている。

意図せず思ったその例えに、ハイクは僅かな苦笑をもらした。

（確かにおよそ一年後に待っているのは天国……いいや、地獄だろ
うな……）

そんな考えを拭い捨てるように軽く頭を振る。

ハイクは両手を握り締めながら、一念発起して手洗い所から出た。
そして

「何、だ……？」

人間たちは消えていた。

静寂である。

互いの足りない部分を補完し合うみたいにな、あれだけせめぎ合っ
ていた人々の姿が、駅構内から忽然と消失していた。

駅員もいない。

改札も電光掲示板も駆動していない。

人混みを苦勞して進んでいた自分の姿が馬鹿馬鹿しくなるほど、目の前は空虚で異様なしじまに塗り変わっていた。

それこそ数百人単位の大規模な神隠しが発生したかのような光景いや、むしろこれはハイクの方が神隠しの対象となったのか。

どちらにせよ、絶句ものの非現実的な状況に遭遇したハイクは、
「……はあ、巻き込まれるのは苦手だ」

重い溜息と共にそう呟いた。

彼の淡泊な反応は、多くの人間が駅から消えた異常事態にも劣らないくらい、現実味に乏しかった。

つまり、

「貴様……何だ」

「なぜ我らの結界内に部外者がいる？」

「その上、明らかに同胞ではない。何者だ。唱えよ」

つまり、完璧な無人ではなかったのだ。

あくまでも『人がいない』という観点を詭弁の主軸にするなら、確かにこの場に人間は不在している。

そう。

ハイク自身を含めて、彼の視界に人はいない。

「ナキィエクイルド」

名乗ったのは、『彼ら』に対して敵意の類を抱いていないと伝えるための表明だった。

もつとも、口にしたものは適当に思いついた偽名だが。

ハイクはパーカーのポケットに両手をつ込み、片足重心という締まりのない体勢で構えていたが、視線だけは注意深く『彼ら』に注いでいた。

数は七体。

全員が全員、昨今の近代的な人間社会の模様に対して、ひどく浮いた出で立ちをしている。

ポンチヨに近似した布を繋ぎ合わせることで独特加工した民族的

衣装に身を包んで、古めかしい雰囲気を押し出していた。

外見はハイク同様、人のフォルムに準じている。

頭と髪があり、肌色の顔と表情があり、胴体に付属する手足があり、言葉を話し、言葉を理解するだけの思考と思想を持つ。

だが、肉食獣にも似た獰猛な瞳と銀髪が、決定的に彼らが人ではなく『彼ら』であることを明かしている。

「個を識別するための呼称など訊いていない」

一番手前にいた男が威圧的な口調で言った。

リーダー格だろうか、人間の外見を基準にするならば二〇代後半頃に値する容貌。

尖った目つきの内部に獣のそれが潜んでいる。

「我らが回答として貴様に望んだのは、貴様個人の無価値な名称ではなく、所属名だ」

もはや『人間だ』と言って押し通せる空気でもない、とハイクは判断した。

「別に故意的に割り込んだわけではないんだが。俺はたまたま居合わせたただけだ。お前たちが界限の探索を怠ったせいだろう」

「はぐらかさず素直に質問に答えたらどうだ、吸血鬼」

ハイクごと空間を蹂躪する勢いで一気に肥大した殺気。

視認できない無数の刃物が全方位から飛来したかのように、ハイクの全身がぴりぴりと痛んだ。

視覚や触覚を介した情報として、痛覚にまで影響を及ぼすほどの圧力。

単なる霊長類では放出も容易ではない超自然的な殺意。

だが、七つ分の重厚な敵意を照準され、針のむしろに座ったはずのハイク当人は臆する風でもなく、相手を小馬鹿にするように肩をすくめた。

「穏やかではないな。これだから『略奪者』は苦手だ」

「貴様、我らを愚弄するつもりか」

「いいや、そんなつもりはない。気分を害したなら謝る。悪かった」

ちよつとした挑発に反応して手前の男が双眸を凄めたので、殊勝な態度とは言い難いが、ハイクは素直に謝罪を口にした。

「というわけで、ここから早急に出してくれないか。俺はお前たちの儀式だの規律だの血生臭い前時代的な掟だの戒律だの、そういうのに干渉するつもりはないんだ。また詮索するつもりもない。そもそも興味がないからな」

嘘ではない。

ゆえに、彼らの射抜くような眼差しからハイクは目線を逸らさなかつた。

「つまるところ単なる旅鳥なんだ。無所属のな」

「なるほど、流れの吸血鬼か」

ハイクの様相から納得したのか小さく頷く男だったが、彼の口からハイクが期待した通りの言葉は返ってこなかった。

「しかし、残念ながら見逃すわけにはいかない」

「ああ……もしかして、この状況は部外者が目撃したらまずいシーンだったのか。ちなみに俺は口が堅い方だ」

「この場は我らにとって誇りを取り戻すための計画、その一端だ」
その単純かつ自己中心的な返答に対し、ハイクは呆れ気味に鼻で笑った。

七つ分の視線が鋭さを増すことにもお構いなしに、吸血鬼の少年は粹なジョークでも言い出しそうな口調で、

「おいおい、よしてくれ。この場面に俺が居合わせたのは、そつちの不備だろう。それはお前たちの責任だ。自分たちの失態によって生じた不利益を、他人に押しつけないで欲しいものだが？」

「ごもつともだ。非はこちらにある。正論だ。弁解するつもりは毛頭ない」

「だろう？」

ハイクは表面上友好的な笑みを浮かべたが、内心では渋面を作り舌打ちをしていた。

（開き直ったか。だから、言葉で解決できないことは苦手だ）

男は一步前に踏み出して言う。

「だが、あいにく我々は自らの非を認めた上で、貴様を糾弾できる権利がある」

「やっぱり、そうなるのか」

「困め」

男の端的な指示に、周りの同胞たちが動き出した。

獲物を追い詰める獣のような挙措で、扇状に陣形を組んでハイクを包囲する。

「問答無用、か。今の俺は争いとか好まない平和主義者なんだが」
ハイクはまたぞろ溜息をこぼした。

同時に自身が置かれた状況を把握するべく、視界から有益な情報を汲み取ろうと抜け目なく周囲に視線を配る。
伏兵の存在を確信していたからだ。

それも、おそらく目の前の集団よりも厄介なのが、最低でも一人（しかし、人狼がこんな都会にまで出っ張って一体何をやってたんだ？）

そこで初めて疑念を抱いたハイクの目に留る物体があった。

（あれは……）

一〇歳前後の小柄な少女が地べたに横たわっている。

その身長と同等まで伸び切った黒髪が特徴的で目を引いたが、容姿ははつきりと見えない。

人狼たちがハイクの視線を憚るように、立ち塞がっているからだ。意識があるのかないのかも、ハイクの位置からでは確認できなかった。

（ますます面倒そうな場面に出くわしたな。仲間割れか？ どうせ規律だの何だの絡んでいるんだろうが）

「なあ、その子、ケガをしているようだが手当はしなくていいのか」
ハイクは適当に思いついた可能性を脳裏に並べてから、憶測でそう発言してみた。

実際に負傷しているかどうかは分からない。

しかし、手前の人狼はさらに憎悪を込めた目つきでハイクを射抜き、警戒と威嚇を含んだ低い声をあげた。

「貴様には関係のないことだ」

「そうか。まあ同感だ。内部事情をどこの馬の骨とも知れない吸血鬼に、おいそれと言うわけにはいかないだろう。……なあ、どうせならこのまま互いに無関心を貫かないか？」

「それとこれとは話が別だ」

人狼側は断固として意見の姿勢を変えないつもりらしい。

ハイクはやれやれと言わんばかりに、かぶりを振って嘆息した。

「人狼部族には民族的な価値観から、頑固者が多い印象を持っていたが、その偏見はあながち的外れでもなかったみたいだな。まさか、ここまで融通が利かないとは予想以上だ」

「黙れ、無法者。衝動のまま人の血を無差別に食い散らかすバケモノが」

「大昔のことを言うてくれるなよ、四足獣。現代の吸血鬼は穏健だ。人の血なんて吸わなくても正常に生きていける」

ハイクの言葉を最後に、それ以上の言い合いは交わされなかった。本当は双方ともに最初から 相手の正体に気づいたその瞬間から 理解していたのだ。

吸血鬼が放つ言葉は。

人狼が放つ言葉は。

両者の耳には届いても心には響かないことを。

人々が唐突に消えた無音の駅構内で、ただ人外が存在同士が正面から睨み合う。

互いに合図など待つような間柄ではない。

そんな義理など相手に持たない。

好きなタイミングで攻撃に移る。

（動く）

そう予兆したハイクはパーカーのポケットから両手を出し、躊躇なく瞼を閉ざした。

刹那の暗闇を体感し　開ける。

瞬きという一瞬で、ハイクの瞳の色は変わっていた。

漆黒から血が滲むかのような朱眼へと。

同時、ハイクを囲む形で三日月型の陣営を展開する人狼たちが、凶暴な牙を剥いた。

最も前線にいた人狼が姿勢を低く落とし、爪を立てる要領で五本の指を開く。

極限まで縮めたバネを解放したような瞬発力で、地面を蹴り飛ばし跳躍する。

その人狼に引き続き、五体の狼が同じ構えから一斉にハイクに飛びかかった。

彼らは空中で器用に身を捻り、恐るべき回転速度を得たドリルと化して突貫してくる。

それに応じるハイクは無言のまま、パーカーの内側に右手を滑り込ませた。

（　人狼、か）

驚異的な身体能力を有し、五感^{イカンスロープ}は獣以上の感知力を備えている彼らは、けれど人間が映画や小説で描写するように、あからさまな銀狼化現象を起こさない。

せいぜい臨戦態勢時に瞳孔が縦のスリット型に変じたり、もともとは黒の髪が銀に変色する程度のもの。

その外見の変態^{シフト}から別名『銀狼』とも呼ばれたりする。

彼ら人狼の特徴は『人型』という見かけに寄らない身体能力だ。

コンクリートの壁を片腕で粉碎する圧倒的な怪力と、自らの残像すら置き去りにする移動速度。

その両方を兼ね備えた人外種族相手に、生身で立ち向かえば人間だろうと吸血鬼だろうと、まず勝ち目はない。

（だからと言って、それが無敵というわけでもないが）

吸血鬼ハイクⅡRⅡセカンド。

彼が『血のような朱色に塗り替わった両目』で視認している現在

進行形の世界は、その全ての速度がスローモーション化していた。
理由は開眼した血色の双眸。

吸血鬼の特殊能力　瞳術だ。

吸血鬼という人外種族は、人狼と違って身体面は人のそれと大差がない。

寿命や外見の老い方さえも、現代の吸血鬼は人間とほぼ同等である。

古代では、二〇〇の年月を生きる吸血鬼も『若者』という評価が吸血鬼たちの共通認識だったが、今では一〇〇歳生きたら長命とまで言われるくらいだ。

これは、彼ら吸血鬼が『過去の事件』を経て教訓を活かし、人類社会に適応するために、独自の種族的な進化　あるいは退化を年月をかけてゆつくりと遂げた結果である。

伝承によると、ハイクたち吸血鬼は十字架や日光に弱く、鏡にも映らないバケモノとしてセンサーシヨナルな要素で語られているが、実際は異なる。

古今東西の吸血鬼は日中も堂々と街中を出歩き、先程のハイクのように鏡にだって姿が映る。

無論、不死身でもない。

聖別された銀の弾丸だろうと、軍人が扱う量産品の弾薬だろうと、銃火器で心臓を撃たれれば吸血鬼だって死ぬのだ。

見た目だけではなく、細胞レベルで人に近づくような種族単位の変化が続いている吸血鬼は、それでも過程で失わなかった能力がある。

それが吸血鬼を吸血鬼たらしめている『吸血による同胞の量産』と、瞳術だ。

その二種類の特殊能力だけが、現代吸血鬼のDNA内部に色濃く残っている。

おそらく、この特異点は次世代の吸血鬼たちにも受け継がれて行くのだろう。

そして、そんな吸血鬼の遺伝子情報を有するハイクが開花した瞳術は、『可視する世界をスロー再生する』というものだった。

リアルタイム

現実世界そのものに物理的干渉を引き起こしているのではない。

時間が流れる速度はあくまでも一定だ。

吸血鬼の目が朱に染まった程度で、科学者がさじを投げるような自然法則の崩壊が発生しているわけではなかった。

ハイクの瞳術で変化するのは、彼の動体視力と言えば分かりやすいだろうか。

ハイクの視認する世界の動作が緩慢になって見えるのは、彼の体感的な問題であり、時間が引き延ばされているように感じるのは錯覚に過ぎないのだ。

現象的にはスポーツ選手などが体験するという、ゾーンやフローに近いかもしれない。

その証拠に、六体の人狼が銀色の風となって突撃してくる速度だけではなく、ハイク自身の所作もスロー世界の中ではゆったりとしている。

思考の回転速度だけが、スローモーション化した世界に追尾できるのだ。

この瞳術は行使すると目の色が朱に塗り替わる影響なのか、ハイクが知覚する光景の色彩を透明な赤にする。

視界は血の色に曇ってしまい良好とは言えないのだ。

それに、いくら眼球の動きと思考が人狼のスピードを追い抜いていても、体がついてこなければ力は意味をなくすだろう。

だが、そこは人間サイドの進化に傾向した人外種族。

足りない速度は人類の武器で補う。

ハイクはパーカーの下に装備するショルダーホルスターから抜き出した、黒金の回転式拳銃　リボルバーを右手のみで構え、亜音速で肉薄してくる人狼に向けて容赦なく撃った。

機構はダブルアクション。

引き金を絞ることで撃鉄が自動的に起き上がり、銃口から銀色の

鉛が飛び出す。

人狼の移動速度は脅威だが、ハイクのリボルバーから発射される弾丸の飛翔速度には劣る。

対敵時の距離が一〇メートル以上離れていたことも幸いした。

どれほどリボルバーから放つ銃弾が人狼の速度を凌駕していても、引き金を絞らなければ当然ながら火は吹かない。

戦闘開始時の距離が近すぎたら、発砲以前に彼らの強靱な体当たりを食らって、体がばらばらになっているところだった。

レンコン状のシリンダーに装填できる弾薬の数は、六つ。

現段階でハイクに突撃してきている人狼の数は、六体。

そして、ハイクが人差し指で引き金を操作した回数と、手首に軽い反動を受けた回数も、六回。

くぐもった発砲音がスロー映像の中で炸裂し、遅延する空気を震わせた。

銃口から虚空にのびた六つの弾道はハイクの思惑通り、忠実な直線を描く。

その軌跡の全てがハイクを裏切らないまま、竜巻じみた回転で向かいくる人狼の肉体へと綺麗に吸い込まれる。

銃器の扱いを一通り訓練したハイクにとって、目で追える標的に銃弾を撃ち込むことなど造作もないのだった。

（しかし、相も変わらず気味が悪い世界の見え方だな。この瞳術による恩恵は苦手だ）

あまり自身の瞳術効果を好んでいないハイクはこれ以上、能力を使い続けるのは無意味だと判断した。

無意識に行っている瞬きよりも、少しだけ長い意識的な瞬き。

すると、朱に染まっていた世界の映像があらゆる色彩を取り戻し、本来の時間速度が彼の体感に回帰した。

見れば、一発ずつ急所を撃たれた人狼たちが、ちょうど空中で大きくバランスを崩したところだった。

摩擦による慣性停止は期待できず、彼らは地面で激しくきりもみ

しながらハイクを巻き込む軌道で転がり出す。

しかし、ハイクはスロー世界でその被害に遭わない位置を見極め、すでに移動を完了していた。

山の上から急角度で転がり落ちてきたかのような勢いで、地べたを何度もバウンドする六体の人狼が、吸血鬼の両サイドを通り抜けた。

鎮静。

ハイクはそれらの惨状を涼しげな表情で一瞥し、銃のラッチを引いてシリンダーのロックを解除した。

スイングアウトで空薬莖を排出する。

内ポケットから予備の弾薬を取り出し、慣れた手つきで再装填完了了。

「人狼は現代の吸血鬼をなめすぎだ」

数メートル後方で苦しみうめく人狼たちを無視し、ハイクは前方に銃口を向けた。

標準した先に中性的な風貌の人狼がいた。

少年か少女か分からない。

長身で落ち着いた佇まい。

慎重派なのか、その人狼だけが一斉襲撃に加わらなかった。

「あなたも知らないわけではないのでしょうか？」

人狼はどこか人形的な口調で唇を動かした。

声質からして少女かもしれない。

「私たち銀狼が、あなたたち吸血鬼に持つ感情を」

ハイクはリボルバーの引き金に人差し指をかけたまま、相手を疑わしそくに観察する視線を送り、小さく顎を引いた。

「もちろんだ。お前たちからしたら散々だった話だろう。同情はする。だが、大昔のことで俺に因縁をつけられても困る。これは八つ当たりだ。俺自身はお前たち人狼に何も危害を加えていないんだからな。売られた喧嘩なら正当防衛のため甘んじて買うが、こちらから売る気は毛頭なかった」

「平行線ですね。それなら、誰が責任を取ってくれと？」

「責任？」

ハイクは首を傾げた。

「私たちは、もうこういう風にしか生きられないんです」

何を言っているんだ、こいつは。

ハイクがいよいよ胡乱に目つきを細めた時、

「皆さん、まだ動けますね？」

後ろで人狼たちが体を起こす気配があった。

ハイクは無意識に舌打ちする。

立ち位置が悪かった。

前方と後方を、リボルバー一丁では対応し切れない。

両サイドを視界に入れるようにハイクが体の向きを変えると、

「撤退です。ここは出直しましょう」

と、人狼の少女が言った。

賢明な判断だ。

人狼は個より集団を優先する特性がある。

手負いの仲間をこれ以上、戦闘させるわけにはいかないのだろう。

向こうもハイクの射撃技術に気づいている。

いかに人狼と言えども、不死ではないのだ。

ハイクとしても彼らが引き下がる姿勢を見せてくれたのは、あり

がたかった。

のだが、ハイクは人狼の少女をわざわざ引き止めて、

「おい、荷物を忘れていないか？」

顎をしゃくつて言った。

吸血鬼の視線に注がれているモノを、人狼の彼女も視界に収めた。

その眼差しには憎悪と侮蔑が籠っている。

まるで吸血鬼を目にしている時と同じ眼光。

「ああ、ソレならあなたに差し上げます。腐ってもこれが流儀です

から。戦利品ですよ。一旦、あなたに預けておきますから」

作り物めいた薄い微笑み。

その裏に抱く黒い感情を、一瞬後にはおくびにも出さず、人狼の少女は高く跳躍した。

瞳術を行使していない今では、目で追うのも一苦労だ。七つの影が駅の構内からあつという間に去って行く。

「戦利品って……」

ハイクはパーカーの下に仕込んでいるショルダーホルスターに愛銃を戻しつつ、迷惑そうな表情を露骨に表した。

「別にいらないんだが……」

地べたにうつ伏せになり、浅い呼吸を続けている黒髪の少女。

人狼の民族的な衣装を着ているが、生地が薄い上に継ぎ接ぎだらけでぼろぼろだ。

「おい、起きろ」

近寄りながら呼びかけると、少女は朦朧とした目を開いてハイクの顔を見上げた。

その右眼はくすんだ朱、左目は宝石のような碧を湛えていた。小さな切り傷や汚れが目立つが、オッドアイの少女は思ったよりも愛らしい顔つきをしている。

「いつまでもこんなところで寝ていると、色々と面倒なことになる。せめて人目につかないところに移動したらどうだ」

事務的にそう告げて、ハイクは踵を返した。

彼女の正体や境遇についても一切関心を示さない。

厄介事の中心に、少女が携わっていることなど考察するまでもないからだ。

先程の人狼は去り際に『この少女を預ける』と言った。

そう宣言したからには、遅かれ早かれ取り返しにくるつもりなのだろう。

奪取するだけの戦力を拵えて。

しかしハイクとしては、少女の身柄などどうでも良い。

これ以上、人狼のいざこざに付き合う理由はないのだ。

「じゃあ、俺は行くからな」

感情のない声を発し、この場を早々に離れようとしたハイクだったが

「おわっ、な、何だ!？」

ハイクのリアクションは大袈裟ではなかっただろう。

うつ伏せに倒れていた少女が、恐怖にでも抗うかのように呻きながら起き上がるまではよかった。

けれど、何を血迷ったのか背後からハイクに抱きついたのだ。

オッドアイの少女はハイクのパーカーを小さな両手でぎゅっと掴み、今にも泣き出しそうな表情で、

「……っ！」

唇をぱくぱくと開閉させた。

声が出ていない。

それなのに、いや、そんなことは百も承知なのだろう、少女はまるで何かを訴えかけるようにハイクに向かって音なき言葉を続けた。

ハイクの顔つきは驚きから困惑、やがては 苛立ちへと変遷し、

「あのな」

眉間にシワを寄せて、腰の辺りにある少女の幼い顔を睨む。

「お前、なんのつもりだ。慣れ慣れしいその手を離せ」

ハイクはパーカーを握る少女の両手を、冷淡に引き剥がした。

その反動で彼女の小さな体が後方によるめく。

しかし、それくらいでは少女も屈しなかった。

朱と碧の瞳に涙を溜めながらハイクに縋りつき、懸命に口を動かす。

「何だ、俺に助けて欲しいのか」

そう訊ねると、少女は肯定とも否定とも取れない曖昧な頷き方をした。

「まあ俺みたいな部外者でも、お前が連中に関する重大なトラブルを抱えているのは察せる。けどな、それなら他を当たった方が得策だ。吸血鬼に解決を頼むなんて、余計にこじれるだけだからな」

「……っ！」

「悪いが俺は人狼のトラブルメーカーを匿えるほど大らかではないし、クレーマー処理の心得もない。大体、どんな義理があつて見ず知らずのお前を俺が助けなくてはならない。俺にメリットはあるのか。お前がそれ相応の利益をもたらすのか」

そこで少女は唇を引き結び、俯いた。

「分かったな？ ほら、もう行け。じきに、ここの空間も正常に入れ替わり、元に戻つて人目につくはずだ」

ハイクは忌々しげに言い捨てて歩き出す。

けれど、いざ一歩前に踏み出すとパーカーの袖がクイツと後ろに引つ張られて、全然前に進めなかった。

（はあ……子供は聞きわけがないから苦手だ）

少女はなおも執拗にハイクに縋った。

よほど諦められないらしい。

何度きつい態度であしらつても少女はめげなかった。

「いい加減にしろ」

ついに痺れを切らしたハイクが、相手の本能的な恐怖心を誘うトインの声を発すると、少女の肩がビクツと小さく怯えた。

はつきり言つて武力行使はハイクの趣味ではない。

対話や金銭で平和的な解決が図れるのなら、それに越したことはないのだ。

相手はまだ外見上、一〇前後の若い少女。

そんな彼女に暴力の象徴とも言えるリボルバーの銃口をチラつかせて脅すのは、かなり良心が痛むところではあった。

「それ以上、俺に近づくな」

それでもハイクは涙目の少女に告げた。

そこから先、一步でも進めば容赦なく引き金を絞ると。

少女は僅かの間、戸惑った様子でおろおろとした後、やっぱり前へ踏み出した。

瞬間、がらんとした駅構内に乾いた銃声が一発、反響した。ささやかな鮮血が虚空に飛散する。

なのに、悲鳴どころか嗚咽さえハイクの耳朵には触れなかった。しかし、痛みを感じていないわけではないらしい。

少女は鉛玉が貫通した膝を押さえ込みながら、地面へ惨めに倒れ込んだ。

これまで必死にこぼさないように我慢していた涙も、激痛を引き金にととう決壊した。

ハイクは特に表情を作らないまま、リボルバーを懷に仕舞う。

少女は震える体を殻に閉じ込めるように丸め、額に嫌な汗をびっしりと浮かべて苦しんでいる。

ハイクはそんな彼女に歩み寄る。

少女は苦悶の面様を怪訝に歪め、片膝について覗き込んでくるハイクを見上げた。

何かを期待している彼女の眼差しに、けれどハイクが答える声はなかった。

ハイクは少女の右膝、リボルバーで打ち抜いた患部に視線を移す。少女が痛みのあまり傷口を押さえている。

血に濡れた彼女の両手を強引にどかし、ハイクは自身の人差し指をそこへ無造作に当てた。

ぬるっ、と指先に湿った感覚が伝う。

それだけで形容しがたい激痛が走ったのだろう。

少女は瞼をきつく閉じて小刻みに体を震わせると、ついに失神してしまった。

「胸糞が悪い予感しかないな、これは」

ハイクは気を失った少女に構わず、そのまま彼女の血が付着する人差し指を舌先で慎重に舐めとった。

直後、ハイクは少女の置かれている状況の大半を察する。

人間社会にひっそりと同化し、人と同様の生活を送っている人外種族。

その代表が現代の吸血鬼だ。

今も昔も彼らは大雑把に言って、三種類に分けることができる。

他種族　例えば人間や人狼の血液情報や遺伝子情報、細胞などを有していない純粹な吸血鬼を『純血』。

他種族が吸血鬼の吸血によって血液間で交わった結果、生まれた吸血鬼を『混血』。

吸血鬼と他種族が肉体的に交わった結果、母胎から生まれた吸血鬼を『劣血』。

そしてハイクの推測通り、少女はハーフだった。

摂取した血から得た情報によると、『劣血』だ。

それは吸血鬼サイドの呼び方で、人狼サイドの呼称を尊重するならば『原罪』か。

これで合点がいく。

先刻交戦した人狼の集団は、もしかすると『原罪』の少女を抹殺したかったのかもしれない。

人狼が吸血鬼に対して友好的でないのは自明の理。

それくらい昔から争ってきた種族なのだ。

それなのに吸血鬼と人狼が交わった結晶を、人狼が寛容に受け入れるはずがない。

（秘境に住む民族の中には、奇形を間引く習いが現在も残っている。人為淘汰か。いや、……あるいは『道具』にされていたのかもしれないな）

どんな能力かは知らないが、この少女も吸血鬼特有の瞳術を保有しているはずだ。

オッドアイの片方、右眼の朱が怪しい。

その瞳が人狼にとって何かしらの利益を与える力だとしたら、彼女を殺すのも惜しいと考える可能性だってあるはずだ。

（どんな経緯かは分からないが、自分の宿命を察したこの『劣血』は、おおかた連中から逃亡してこんな都会まで逃げ出してきたんだろ）

だが、それにしただって妙だった。

思い過ごせない点が一つだけある。

駅から人が消えた、この状況だ。

仮想異世界を擬似的に現実の空間に倒置して構築する、神隠しに近い結界。

それは、あらかじめ『結界内部に閉じ込める対象』を設定できる便利な魔術の類だ。

人が己の生命力を削ってまで物理法則に抗い、人工的に起こす奇跡。

ハイクも詳しいわけではないが、吸血鬼や人狼が魔術を行使できないことくらいは知っている。

前述の通り吸血鬼の種類は大まかに三つある。

中には人間から吸血鬼になった者もいる。

だがしかし、『吸血鬼』という枠組みになった以上は、『純血』だろうと『混血』だろうと、決して人ではない定義になるのだ。

人狼も外見こそ人間だが、ハイクたちと同じ人外種族である。

魔力は人の生命力からしか生まれない。

魔術は人の身でしか扱えない。

また、今日び高度な科学技術が発展した現代の人間社会では、魔術というオカルトチックな概念は、もっぱらファンタジーといったフィクション世界でしか受け入れられておらず、一般では実在するものとは認識されていない。

吸血鬼も人狼も魔術も、これほどポピュラーな存在が、しかし信じられていないと言うのは少々、当人としては奇妙な思いだった。

ともあれ、魔術師が現実実在に実在を知っているハイクとしては、先程の一件に引っかけかりを覚えるのだ。

（人間、それも魔術を扱える人間が、一枚噛んでいるか？）

たかが『劣血』の少女一人を抹消するのに、人間の手を借りるなど人狼らしくない行動だ。

らしくないと表現するのは、もちろん断言できないからだ。

人狼は過去の『吸血鬼狩り』で、人間という種族に対しては少なからず敵意を抱いていないのだから。

「いや、俺なんかが気にしても始まらないか。こういうことはシリアルに連絡するのが一番だろう」

誰かに聞かせるわけでもなく、そう呟いてハイクは静まり返った駅構内から退場した。

ぐったりと気を失っている『劣血』の少女に、振り返ることもなく。

3 | 私は彼を心から愛している。恨んでもいるが、愛してもいるんだよ

レッドアウトファミリー の三代目頭領は、今日も事務所で多忙な時間を過ごしていた。

荘厳な黒檀の執務机に組んだ両足を投げ出しつつ、赤いレザーの肘かけ椅子に座って、ぷかぷかと煙管で紫煙を吹かしている様子は気楽なものだが、その実、取り巻きの部下たちから殺到する報告に対して目まぐるしく頭を回転させている。

そんなボスの前に並ぶ黒服の男たちのうち、一人が口を開いた。

「ボス、例の金融企業から投資額の件について最終確認の書類メールが届いています」

「ああ、分かった。後でチェックしておくから、私のコンピュータにリンクしておけ。返信の文章内容はお前に一任する。粗相のないようにな」

「ボス、北の工場跡地を拠点に、素人に対して薬をさばいていた密売グループの元締めを捕縛しました」

「ご苦労。適当に痛めつけて情報を吐かせろ。そいつから関係のあるグループを芋づる式に炙り出せ。手段は問わん。ただし、硬派にな」

「ボス、先日下町に三号店をオープンした居酒屋 ランデブー がみかじめ料を払ってくれません」

「情けない言い方はよせ。自分が誰なのかもっと自覚を持って発言しろ。……とは言え、上納金は任意なわけだし、あそこの親父は頑固だからな。ま、構わんさ。用心棒が必要ないってことだろう。放っておけ」

「ボス、東町に拠点を置く レナードファミリー の構成員が度々、我々の縄張りで目撃されています。今月にいたっては一二件」

「ケツ、ぼつと出が一丁前にちょっかいだけはかけてきやがる。だ

が、向こうも派手には動かんだろうさ。こっちはトップが変わって大事な時期だと知っての偵察だろう。しょせん軟派なチンピラ風情の寄せ集めだ。当面、泳がせておけばいい。だが目は離すなよ。下町の連中にも警戒するよう忠告してやれ」

「ボス、変態です。バベルズファミリー がガサ入れにあつたようです」

「ああ知ってるよ。硬派だった連中が一体何をしくじったんだかな。こっちまで飛び火してこなけりや良いが……。それと私は変態じゃない。大変な、大変」

「ボス、ナイトクラブ チェリー のオーナーから是非ボスに猫耳メイド服着用の上ご来店ください、との熱い伝言を預かりました。ボスのファンクラブ会員の方々が待望しているようです」

滞りなく部下に指示を与えていた レッドアウトファミリー 三代目頭領の少女 シリカ「R」サードの整った顔が一瞬にして引き攣った。

そう、誰がどう見てもそのマフィアのボスは少女なのだ。年齢は一五。

お嬢様風の顔立ちには年相応の幼さと、まだ成熟し切っていない凛々しさが同居している。

しかし小動物のように愛鏡のある大きな瞳と、平均よりも低い背のせいでシリカは一二、三歳の女の子にも見えた。

全体的にゆるくウエーブするセミロングの髪色は、染めた明るめのベージュで、前髪だけ両サイドにふんわりと流している。

着ている私服は、ネイビーブルーを基調とする薄い生地オーバーオールの一着だけ。

丈が短く、机の上に投げ出した足や太もが無防備なことになっているが、マフィアなボスの彼女は周りの目を全然気にしていない。「あの変態ロリコンじいどもが……」

右頬をぴくぴくと痙攣させ、シリカは忌々しそくに悪態を吐き捨てた。

「そりゃあ確かに、私に見てくれがマスコットやストラップ、八分の一スケールフィギュアなどにして誰もが常時側に置いておきたくなるくらいキュートであることや、その手の企業からグッズ化の依頼が怒涛のように押し寄せないのを疑問に思うことには十分に理解を示せる。だが、どれだけ可愛かろうと私は レッドアウトファミリー の頭だぞ。似合うと分かっているも誰が軟派な猫耳メイド服なんぞ纏うか。断固として断っておけ。良いな、絶対だぞ」

満更ではないのか本当に嫌なのか、いまいち不明な反応をシリカが示すと、メイド服の件を報告してきた部下は残念そうに肩を落とし、

「ボス、私的にボスの猫耳メイドは拝見したい所思をここに固く表明」

「黙れ、殺すぞ」

少女の一睨みで、いかつい顔をした大の男がしょんぼりと黙り込んだ。

「ボス」

「ああ、もう次から次へと……今度は何だ」

「ハイク様からお電話でございます」

シリカの側近である老紳士ヒカゲが、慇懃な動作で手のひらの携帯端末を差し出す。

シリカは訝しむように片眉を跳ね上げて、

「むふっ」

「ボス」

ヒカゲに一言でたしなめられ、緩んだ頬を慌てて引き締める。

「ふ、ふむだ。ふむ、の間違いだ。さっさと携帯をよこせ」

ハイクは公衆電話を求め、駅前から離れた表通りにいた。目的の電話ボックスを見つけて、四角い箱の中へと潜り込む。

マナーカードを機械にスキャンし、液晶画面に浮かんだ数字を覚えていて番号順に押す。

受話器を手に取り、コール音を三回耳にしたところで相手が出た。しかし、応じた声は妹のものではなく、彼女の側近兼教育係を務めている老紳士ヒカゲのものだった。

妹をトップにするマフィア組織からしてみれば、実の兄とは言えど完全なる部外者なのだ。

連絡が直結しないのも仕方がない。

むしろ、まだまだ新任の彼女がそういう回線の段階処置を施していたこと　ヒカゲのアドバイスだろうが　を褒めてやるべきだろう。

『もしもし』

それでも、ハイクとヒカゲは旧知の仲なので、電話はつつがなく妹へと繋がった。

「よう。シリカか、俺」

『ちよつとちよつと、旅路の前に一体全体どうしちゃったの、お兄い。え？　急に妹が恋しくなつて、ついつい電話しちゃったって？』

もう、どれだけシスコンなんだよつ。相思相愛じゃん。こんなことなら、やっぱりシリカの萌える声一〇〇選を収録したボイスレコーダーを持たせるべきだったかな。実は密かに用意してたんだ。お兄いが寂しくならないようにね。今から取りにくる？』

いつも通り人の話を最後まで聞かず元気なマシンガントークをかましてくれたシリカの浮ついた言葉が終わるまで、受話器を数センチばかり耳元から離していたハイクは苦笑いをもらし、

「……いや、遠慮しておく。そんなことより電話しても大丈夫だったか？」

『大丈夫大丈夫！　万が一に備えて、お兄いのために使用できる時間を一日のどこかに五分は作れるようにスケジュール組んでるから。そのシステムのおかげで五分貯金も溜まってるし。べ、別にシリカの声が聞きたくなつた時は、いつだって電話してくれたって良いん

だからねっ」

「素人一人を優先するマフィアのボスとか心配になるんだが」
そうツツコミを入れると、シリカは快活な声で笑った。

『シリカ的には最後のツンデレ台詞かと思いきや、ストレートなデレレ台詞だったっていう部分で萌えて欲しかったんだけど、まあいいや。それで、どうしたの？　まさか愛する妹の声を聞いて狂い悶えるただけに電話してきたわけじゃないんでしょ？』

それが主な要件だとしても、とシリカは自信満々につけ加えた。
ハイクは少し感心した様子で、

「流石シリカ、大きく勘違いしながらも空気だけは読めるな」

『てへっ。一応はボスなので。五感は敏感に働かせとかなきゃね』
向上心があるのは何よりだが、おつちよこちよいな思い込みの激しさはボスとしての欠陥になり得る。

今度こつそりとヒカゲに注意を促しておこう、とハイクは頭の片隅に書き留めた。

『で、シリカに何の用だったの？』

「ああ、それがな。実は列車に乗る直前にトラブルに巻き込まれたんだ。今、駅前の公衆電話のボックスからかけているんだが」

『トラブルって、もしかして暴力沙汰？　それなら戦闘員でも送ろうか？　いや、ここはむしろこのシリカちゃんが直々に』

「その必要は皆無だ。俺が片付けたからな。でなければ、呑気に電話なんかしてられないだろう」

『はわあ、シリカしびれちゃうよ、お兄いのそういうところに』

「……実の妹に変態的な声を出された俺は、実の兄としてどんな返答をすべきなんだ？」

『あはは、せめて色っぽい声って言うてよっ』

シリカは愉快そうに笑った延長で、上機嫌に言葉を続けた。

『でもさあ、お兄いに絡んだチンピラも不幸だったね。勝てるわけないのに』

「いや、相手はチンピラではないんだが」

『へ？ そうなの？』

「大体そんじょそこらの人間ともめたくらいで、わざわざ多忙なお前に連絡なんかすると思うか？」

『……と言いますと？』

シリカも鈍感ではない。

ハイクの言い回しから不穏な響きを覚えたのか、彼女の声音が若干硬くなった。

そこに レッドアウトファミリー を率いるボスの影を感じ取ったハイクは、さらに声の温度を落として答えた。

「相手は人狼だ」

『！？』

「とは言っても、俺が狙いだったわけではないみたいだが。たんにタイミングが悪かったんだろう。連中のトラブルに対して俺が巻き込まれる形だった。向こうとしてもイレギュラーだったように思う……まあ、結果的に俺が吸血鬼だと分かった途端、連中が目の色を変えて襲いかかってきたことには間違いないんだがな」

あの時、人狼たちはそもそもの目的さえひとまず横に置いて、ハイクに攻撃をしかけてきた。

身に覚えこそないが、吸血鬼という種はよほど人狼に恨まれているらしい。

ひよつとすると、怨念を現代に持ち越すくらい彼ら人狼は、大昔の吸血鬼に酷いことをされていたのかもしれない。

ハイクさえ知らない残酷な仕打ちを。

『人狼がこの街に……ケガとかしなかった？』

シリカの落ち着いた声を受話器が唱えた。

「俺は無傷だ。血の一滴もついていない」

『ホッ、それなら一先ず安心だよ』

「それよりシリカ、ここからが本題だ。あの場では運良く追っ払えたが、連中はまだ街に滞在していると考えていい」

『お兄いが吸血鬼ってバレちゃったしね』

「それもある。だが、それだけでもない」

『どういうこと?』

ハイクの脳裏に、黒髪の少女が地べたに転がり、苦しそうに泣いている姿がフラッシュバックする。

「見たままの状況から察するに、奴らの目的はいつも『劣血』らしい」

『吸血鬼と他種族の肉体的交配によって生まれた吸血鬼……だよね?』

訊ねあぐねるシリカの物言い。

受話器の向こう側では小首の一つでも傾げているだろう。

ハイクは電話ボックスの外に最低限の警戒心を払いつつ、

「人狼サイドからしたら『原罪』。人狼と他種族の肉体的交配によって生まれた人狼だ」

『ああ、なるほどねっ』

シリカは深々と得心した口調で、

『つまるところ、目的不明の人狼集団に狙われてるらしいその「劣血」さんは、世にも珍しい「吸血鬼と人狼の結果」なんだね? で、その子は今どうしてるの?』

「さあな」

肩をすくめ、ハイクはどうでも良さそうに言った。

「目立った負傷が見当たらなかったから、俺が一発だけ膝に撃ち込んでおいた」

『わお、過激だねっ』

「致命傷にならず、かつ他人が目視して見過ごせない程度の傷だ。今頃、街の総合病院にでも運ばれてるんじゃないか。一応は、その手配をしておいた。入院費一年分に相当する金額データを取得しているマネーカードを、手に握らせておいたしな。……今じゃ『不自然な結界』は消えて、駅構内にはすでに人間たちが行き交っている。見た目通りなら日常の光景に戻っているし、血を流している少女を見て見ぬふりをするほど人間も冷たい生物ではないだろう」

『むう、お兄いが赤の他人を無償で助けるなんてシリカ、ちょっぴりジャラシー』

そうは言うがハイクも無血ではない。

後味が悪いのだってごめんだ。

金ならそこそこ持っているし、自身の良心が痛まない程度の偽善活動に精を出すくらいは問題ない。

『でもさ、その「劣血」さんが吸血鬼と人狼のハーフなら、人狼の治癒能力も備わってるだろうから、お医者さんは傷の異常な回復力にビックリするんじゃない？』

「俺がそこまで心配してやる義理はないな」

きっぱり未練なくそう言い放つと、シリカは苦笑気味に『中途半端なんだか、線引きが上手いんだか……』と呟いた。

『てゆうか、人狼はどうしてお兄いが吸血鬼って分かったんだろうね。お兄い、人混みに紛れてたんじゃないの？ それに結界って？』

「連中を中心にトラップ形式の結界魔術が展開されていた。おそらく、内容は『人間以外の生命体を擬似的な位相空間に閉じ込める』ようなものだろう」

『はー、にやるほど。それでお兄いが人間じゃないってバレたんだ。だとしても』

「注目すべきはそこじゃない、だろ？」

シリカの思考を先回りして陳ずると、マフィアのボスは満足げに鼻を鳴らした。

『ふふん、流石はお兄い。シリカの考えなんてお見通しだね。以心伝心だっ』

ハイクは大通りに向けていた視線を、少しだけ足元付近に落とす。その仕種には僅かばかりの哀愁が漂っていた。

「……嬉しそうだな、シリカ」

『お兄いが心配してくれてるからね』

「お前こそお見通しじゃないか」

『あつたりまえっ』

胸の前で勇ましく右手をグーに握るシリカの姿を思い浮かべ、ハイクは柄にもなく何の含みも持たない微笑みをこぼした。

これまで誰にも、おそらくシリカにさえ見せたことがない、子供みたいな表情だ。

照れ隠しの部分からシリカに勘づかれないう、ハイクは喉を引き締めて話を再開した。

「シリカ、お前のシマに勢力不明の人狼が山奥から上京してきたのは事実だ。奴らの目的は『劣血』であって、俺たち吸血鬼とは直接の関連はなさそうだが」

『だからと言って楽観視するのは良くない、でしょ？』

今度はハイクが先回りされる番だった。

「そうだ。結界魔術なんて代物は人間だけが扱える聖域だ。俺たち吸血鬼や人狼は、人の起こす人工的な奇跡は使えない」

『うーん、例えばさっ、人狼が都会にやってきたのは、彼らにとって汚点である「原罪」さんを消すためっていうのが、最も納得しやすいシナリオなんだけど……。腑に落ちないのは、その背後関係に見え隠れしてる魔術師の影だねー』

「そういうことだ」

『りょーかい。ちょっと探り入れてみるよ。皆にも警戒するように言っとくしっ』

皆とはファミリーやファミリー関係者たちのことだろう。

「深追いはよせよ。調べた上で無関係そうなら俯瞰しろ。やり過ごせそうなら、やり過ごせ。魔術師をバックにした人狼なんかに目をつけられたら厄介だ。可能な限り接点なんか持たない方がいい。特に俺たち吸血鬼はな」

そう口やかましく忠告し切ってしまった後で、ハイクはこめかみの辺りをぽりぽりと掻きながら悔いた。

シリカは仮にも レッドアウトファミリー を束ねるボスである。吸血鬼のみを構成員とするマフィアの女王。

そんな彼女に対し、部外者の自分が兄という権限だけで、ファミ

リーのことを横から口出しするのは、流石に過保護がすぎるのではないか。

ハイクはそうに危惧したが、それはまったくの杞憂だった。
『うん、分かった。ありがとだね、お兄い。わざわざ教えてくれて
っ』

そして、ハイクは返すべき言葉を見失ってしまった。

そのせいで躊躇を思わせる無言が発生し、会話の隙間に不自然な空白が生まれる。

『あれ、もしもし？ お兄い？』

『いや、なんでもない。その……礼を言うのは、俺の方……だと、
思ってた……』

受話器の向こうで息を呑む気配。

『……えっと、ごめん。聞こえにくかった。もう一回言って？』

瞬間、ハイクは電話ボックスの窓ガラスに、もたれかかるように頭を押しつけた。

『お前は優しいな、シリカ』

『き、急に何なのさ。いきなり甘い言葉を囁いても何も出ないぞ。
何も出ないぞっ。……出して欲しいなら出すけどさ……』

『いや、何が出るんだよ』

普段はあからさまな甘言や賛辞を控えているハイクが、しみじみとした調子で『優しい』などと言うものだから、さしものシリカも驚いてテンパった様子だった。

それからシリカといくつか他愛ない言葉を交わし、ハイクはそろそろ切り上げることにした。

腹も空っぱであることを抗議するように鳴りっぱなしだ。

『奴らのおかげで列車内のレストランで食事する予定が、大幅に狂ってしまった』

『お兄い、楽しみにしてたのにねー』

『その辺りのファストフード店で適当に満たすしかないな』

『あ、そう言えばお兄いって携帯も持って行ってないんだっけ？』

たまには生存報告ちょうだいよ？　じゃないとシリカは寂しくて死んじゃうから』

「うさぎ発言はよせ。お前が孤独で死ぬタマか」
茶化すように返す。

だが、ハイクの予想に反してシリカから間の手はすぐになかった。ハイクが受話器を握りしめながら不審に思っているのと、

『……………嫌だよ』

シリカの声は、それまでの陽気さが嘘のように萎み、震えていた。

『シリカのこと忘れちゃ嫌だよ……………』

完全な不意打ちだった。

何か言い返さなくてはいけない。

そう焦る度にハイクの頭の中は真っ白になり、有効的な語彙など一つも浮かばなかった。

その無言こそが本当の失言であると気づきながら、自身の情けなさに落胆する。

おそろく沈黙は五秒もなかっただろう。

ふう、と溜息にも似た吐息が聞こえた。

『だーから、一日の間で一回でも良いからシリカのこと思い出してね？　どんな妄想にも脳内シリカを使って良いから。酒池肉林の限りを尽くして良いから。あ、でもリアルシリカが脳内シリカにやきもち焼かない程度にねっ』

結局、言葉はハイクの中で見つからず、シリカが先に口を開いていた。

あれが演技だったのか、それとも一瞬だけ見せた彼女の脆い部分だったのか。

ハイクはそれを全て見抜いた上で、

「……………なあ、今お前の周りには皆がいるんじゃないのか」

と詰問気味に訊ねた。

それが精一杯だった。

『ギクツ。い、いないヨ？　シリカ一人だお？』

「……だよな。お前との健全な関係が勘違いされるもんな。冗談はほどほどにしておけよ」

『（い、言えない。すでにシリカが重度のブラコンであることをファミリーの皆にカミングアウトしてるなんて……絶対に言えない……！！）』

「……なぜだか今、強烈な悪寒が走ったんだが」

『か、風邪の引き始めじゃない？　くれぐれも体には気をつけてよ。それじゃあ、またね。お兄い！』

プツツ、と通信が途絶える。

ハイクは受話器を戻し、電話ボックスの窓ガラスに背を預けて頂垂れた。

「最悪だ……」

側近の老紳士ヒカゲに携帯電話を手渡した　レッドアウトファミリー　三代目頭領は、沈痛な面持ちで嘆きながら黒檀の執務机に全力で突っ伏した。

他の組員が席を外し、室内にいるのがシリカとヒカゲだけでなければ、こんな醜態は晒せないところだ。

「体に気をつけて、なんて皮肉以外の何ものでもございませんからな」

深みのある声。

ヒカゲは顎の下に蓄えている上品な白ひげをゆすりながら、シリカを慰めるように言った。

「しかしながらボス。本当にお見送りしなくても良かったので？　てつきり仕事をサボってでもハイク様を送り出しに行くと思し、実はボスが逃亡しないように事務所の出入り口に下の連中を展開していたのでございますが」

年季の入った朗らかな笑みを湛える側近の老紳士。

シリカは机の上に上半身を預けたまま、不満を灯した三白眼の目つきでヒカゲを睨み上げた。

「ふん、私が行ったところで兄上に『負い目』を感じさせてしまうだけさ。後一年なら無理して会おうと思えばいつだって会える。それに私たち吸血鬼は血で繋がっているんだ。肉体的な距離の遠さなど些末に過ぎん」

「人間で言うところの絆。それとも赤い糸でございますか？」

「赤い糸。ロマンチックな話だが、私たちの場合その赤は血の赤だよ」

重苦しい溜息をこぼし、シリカはふざけた調子をやめて椅子に座り直した。

それからぼんやりと天井を仰ぎ、手の甲を額に置く。

まるで太陽を眩しがる吸血鬼のように。

「だから、見送りなど不要。これで正解だったんだよ。兄上に残された時間は少ない。それなのに、それが分かっているのに、どうして私が彼を見送ることができる？ 私が見送りの場にいたら、それこそ兄上は自由な旅に行きづらくなってしまうじゃないか」

「どうして、そう思われるのです？」

ヒカゲは事務所に置いてあるコーヒーマーカーに歩み寄り、淹れておいたノンシュガーのコーヒーをシリカ専用マグカップに注いで差し出した。

シリカは湯気をのぼらせるマグカップをヒカゲから受け取り、「ハッ、愚問だな。一年前まで一般人同様の生活を送っていたのが、この私だぞ？ そこの阿呆な女子中学生が、いきなりマフィアの頭になったんだ。それまでの交友関係も捨て、一年間マフィアのボスとして生きるためのノウハウを徹底的に叩き込まれた。もはや今ではこの堅苦しい喋り方が完全に定着している。素に戻るのはいや 昔の私に戻るのはいや」と言葉を変えず時くらいだ。そして、そうやってしまったのも、兄上は自分のせいだと考えている。ま、当然の思考回路だろう」

ズズツ、と苦い液体をすする。

舌の上に甘みのカケラもない味が拡散し、甘党シリカの顔がしかめっ面になる。

『純血』の吸血鬼だろうとマフィアのボスだろうと、シリカの外見は一五歳の小娘だ。

事情を知らない他の人間組織に舐められないよう、せめて威厳と風格を維持するために、嗜好品までボスらしい振る舞いを普段から心がけているシリカだが、やはり慣れないものは慣れないし、嫌いなものは嫌いなままだった。

服装だつて表に出る時は、正装を心がけなければならない。

女性が好む『可愛い要素』など片鱗も含有していないブラックコーヒーのせいで、シリカが兄の癖と同様、不服に対して無意識のうちに眉間にシワを寄せていると、

「ボス、不躰な質問しても？」

「あん？ 私の教育係を実直に務めてきたお前が、そんな質問をするのか。別に構わんが」

「恨んでいますか、ハイク様を含め私どもを」

その問いにシリカは動揺しなかった。

老紳士の視線を真つ直ぐに見つめ返し、シリカは淀みなく答える。

当然だ、と。

「私は『純血』の吸血鬼だが、マフィアのボスなんぞになる前の生活を気に入っていたんだ。普通の人間になり済まし、人間らしい自由を謳歌して生きていたかった。こんな硝煙と血と金と悪意の臭いで充満するきな臭いアンダーグラウンドの世界なんかとは、一生無縁でいたかったさ」

シリカは手に持ったままのマグカップに視線を落とし、寂寥の滲む微笑みを浮かべた。

「だが、そうもいかないだろう。兄上は『黒血病』で余命が一年だ。二代目頭領の座から下りるのは当然。誰かがその後を継がないといけないことも分かる。そして、初代頭領ラストⅡRⅡファーストの

実子である『純血』が、三代目の有力候補に選ばれるのは言及するべくもない。私たち吸血鬼の繋がりには、何よりも『血』を重んじるからな。能力や資質よりも、血。となれば、父の実子である『純血』の私が、三代目^{サイド}になるしかないわけだ」

「……ハイク様は僅か七歳で二代目頭領の座につきました。あの方は二代目を受け継いだ瞬間から、ボスをマフィアの世界から遠ざけるように、懸命に計らっていたのでございます。ボスが一年前まで遠縁の親戚の家に預けられていたのは、そのため」

「だろうな、とシリカは相槌を打ちながら、自虐めいた形に唇を歪め、

「兄上なりに私を慮ってくれていたんだろう。そのせいか、私は彼に対してどうしても惹かれてしまう。彼が実兄という実感がわかないのも離れて生活していたせいだろう。一年に一度、親戚が集う時だつて彼は私に近づこうとしなかった。当時は嫌われているのだと思ひ込んで、ひどく悲しかったが……」

「今同じ境遇に至つて振り返れば、あれが不器用な優しさであつたことを理解できる。」

立場が逆だつたら、きつとシリカも同じことをするはずだから。

ヒカゲは吐息にも等しい愁嘆を白髭の上から落とし、

「……余命一年。あまりにも残り少ない自由。ボスはハイク様の貴重な余生を邪魔したくないのでございますな」

側近の表情とは対照的に、シリカは意地の悪そうな笑みを表出して、椅子の背もたれを軋ませた。

「ああ、そうさ。私は兄上が大好きだからな。世界中の何よりも。教育係のお前にはファミリー一筋のボスになるような指導を一年間ずっと受けてきたが……悪いな、私の心の置き場所は一ミリも動いていない。私は彼を心から愛している。恨んでもいるが、愛しているんだよ。この相反するはずの感情が同居する根拠を、お前は答えられるか？」

「はい。夢のない見解でございますが、おそらくボスが憎んでいる

のはハイク様の『体と血』。そして、愛しているのはハイク様の『心』なのでございしょう」

「はは、お前には隠し事ができんな」

「お互い様です」

シリカは冗談半分、嫌味半分で言ったのだが、ヒカゲの面様はこちらの心を見透かしたように涼しげなものだっただけ。

人生経験の違いから『この老紳士には敵わないな』と内心で述べても、絶対に音にはしてやらない。

そんな負けず嫌いの精神を発動した代わりに、シリカは穏やかに舌を回し始めた。

「だがな、私は正真正銘の吸血鬼だ。『血の繋がり』というものに、どうしようもなく愛着を抱く。ゆえに、私は父の『混血』であるお前たちを憎んでいるが、同時にそれ以上に愛してもいるんだよ」

「この上なく光栄でございます」

折り目正しいお辞儀をするヒカゲを一瞥し、シリカは落ち着いた微笑を瞳に湛えて、

「憎悪と愛情の混在。これは私たち吸血鬼特有の思想回路なんだろうか。それとも、人間もこんな心境を持つことがあるんだろうか」

「どうでございましょう」

「ふん。それが把握できていない時点で、結局のところ私たちは人間の猿真似ばかりするシミつたれた吸血鬼風情ってことだ」

言い捨て、マグカップを傾けて一気に中身を飲み干す。

「ところでボス、本当にハイク様を放置なさるおつもりでございいますか？」

ヒカゲは言外に『そんなわけがないから白状しろ』と言っている。聡いな。無論、保険はかけておいたぞ」

「どのような」

「秘密だ」

「ボス」

ヒカゲが一步前に詰め寄ると、シリカはうつとうしそくに手をひ

らひらせて、

「ああ、もう心配するな。ファミリーのパイプラインを利用したわけじゃない。それに、兄上の旅路の邪魔はしないよう釘をさした保険だ。備えあれば憂いなしって言うだろう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6132z/>

【キセキ＝シリーズ】

2011年12月20日19時50分発行